

星条旗が世界を支配・・・などできない

【訳者注】「星条旗が世界を支配」すること、すなわち「パックス・アメリカナ」体制で、世界がアメリカに従うこと自体が悪いのではない。ただしそれは、アメリカが道徳的に世界に範を示すときに限る。今、アメリカは道徳的に世界最下位であろう。彼らはおそらく意識的に、モーセの十戒の項目すべての逆をおこなっている。これは説明しなくても、米政府の行動を見ていれば、誰にでもわかることだが、姦淫項目はどうだと言う人があるかもしれない。これについては、イルミナティ及びその影響下にある者たちの行状を調べてみればよい。今、インターネットでその手立てはいくらでもある。ここで詳しくは言えないが、人間を根源から破壊する Paedophilia と言われるものが、ほとんど彼らの文化になっていると言える。

By Jack Perry

September 17, 2015, Information Clearing House

アメリカ人であることについて、ひとこと言っておかなければならない。そのひと言というのはこういうことだ——ちょっと皆さん、我々は言われているような、そんな特別のものじゃない。ブリッ、おや失礼、今、屁がもれたかな、“アメリカ例外主義”(American Exceptionalism) というものについて言おうとすると、こうなるのだ。なぜかという、これは実は“アメリカ受け入れ主義”(American Acceptionalism) のことだからね。わかる？ あなたは、この茶番劇政府に聞かされるあらゆるウソを受け入れるように期待されている、ということだ。それ以上に傑作なのは、彼らは、残りの世界中の人々も、この同じウソを受け入れるだろうと期待していることだ。申し訳ない、世界の多くの人々はこのことを何度も聞いているだろう。彼らは“アンクル・サム”と一緒に“アンクル・ダフィ”(Uncle Duffy) を演じているのだ。

“アンクル・ダフィ”とは何かって？ あれ、あなたはあれを知らないのか？ 誰でもこのお節介な親戚をもっていて、この者はしょっちゅう、どう生きたらよいか、どんな車を買うべきか、どんな食事をすべきか、などと指図をしている。それであなたは、ただ座って頷いて「フム、フム、フム、なるほど」と言っている。なぜかという、もしこれに逆らおうとすると、この者は勢いづくだけだからだ。世界の残りの人たちも、これに従わなければならない。「我々はシリアで、我々が武装させ訓練したテロリストと戦わせるために、テロリストを武装させ訓練しなければならない。なぜかという、軍隊がまともに彼らと戦うのを支

持するのは、ますますテロを助長することになるからだ。」ウラジミール・プーチンはこれを聞いて「フム、フム、フム、なるほど」と言っている。

アメリカ例外思想？ 尻くらえ！ なんと、私はアメリカ国旗を見ると、背筋がゾッとするようになってしまったようだ。そうだ、かつて私はこれが愛国心だと思っていた。それから私は、これが本当は何であるかがわかってきた——それは、崇拜するように高く掲げられたこの布きれを見るたびに、背筋を走るさむけだ。それはアメリカ政府が、半ば征服したが後は運任せのときに、反対することも支持することもある政権の、偽のアイドルとして崇拜されるものだ。もしアメリカが、ドッペルゲンガー（分身）をもっていたら、それは自分を、信用できない、傲慢な、嘘つきのガキ大将として憎むことだろう。我々は、この国が“地球上で最も偉大な国”だと教えられる。誰とくらべて？ バングラデッシュか??！ おいおい、少なくともあの国の人たちは、世界を支配する方法を知っているなどと、言い触らしはしないよ。だから私は、この偉そうなニセ預言者どもの国よりも、あの人たちを信用するね。

いや全く、もしこの国に得意分野があるとしたら、バンパーのステッカーの文句を哲学に仕立てることだろう。私はこの前の記事で、新兵募集の **Thank you for your service**（国の為に働いて下さり有難う）云々という標語について触れた。それについては湾岸戦争が大いに役に立った。1991年以前には、騙されて兵役募集の紙に名前をサインする者たちが十分いる限り、政府はそんな心配をする必要はなかった。それから彼らは、すべての退役軍人を事実上の英雄に仕立てることによって、ベトナム戦争を正当化できることがわかった——将来のすべての無意味な、目的のわからない戦争にも、本物の正当化は何も必要がないだろうと。なぜなら、戦争に反対なら、軍隊も支持しないからである。我々の馬が、もう一つの“牛のクソ”戦争に従軍することになりました、応募ありがとうございます。なるほどそうか、いっばつお見舞いしようか、あほうども！

私は、アメリカ人であることを誇りに思うべきだと言われた。何が誇りだ?! 大統領選に出馬しているあの道化師どもを見よ！ もしあの者たちが、我々の“最上で最も賢い”者ならば、誇るべきものは何ひとつない！ ここでちょっと休ませてください、皆さん！ もしこういう者たちが、我々が信頼して核兵器を手渡し、人類を絶滅させるのを任せられる、最もすぐれた人々だというなら、我々の国家ほど狂った国家はない。再び言うが、何を誇れと言うのか？ これが私に思い出させるのは、風変わりなある隣人だ。彼は自分の庭に山ほどの錆びた車やがらくたと、たった一つのデイジーの鉢をもっていて、これを自慢にしている。いや、彼がこれを自分で植えたのではない、自分のものだと言っているだけだ。ちょうどアメリカが、自分でやったと言いながら、やっていないものを、自分の手柄にしているのと同じだ。

第二次大戦がそうだった。我々の言うことを聞いていると、あなた方は、我々が片手だけでやすやすとあの戦争に勝ったように思うだろう。誰も認めたがらないが、なんと実は、**あの戦争で第3帝国を基本的に叩きのめしたのは、ロシア人だった**。今日我々は、あたかも、もし我々がいなかったら、フランス人は、今頃ドイツ語を話し、ブリーチーズの代わりに、ザワークラウトや豚ソーセージを食っていたかのように言う。それで我々は、彼らがイラク戦争に参加しようとしなかったとき、カンカンに怒って、それを見せてやったではなかったか？ 我々はフレンチ・フライを、“自由フライ”と名前を付け替えた。再び言うが、深揚げのポテトに愛国的な名前をつけることが、国家としての誇りなのか？

そこで、言わせてもらいたいが、“アメリカ例外主義”などというものはない。誇れるものは何もなく、我々は地上で最も偉大な国でもない。いわゆる「新世界」は、ペルシャ（今日イランと呼ばれている）文化がすでに何千年の歴史をもっていたときに、まだ「発見」されてさえいなかった。しかし、そこへアメリカがやってきて、君たちのやり方はすべて間違っていると言う。彼らはただ頷いて、「フム、フム、フム、なるほど」と言う… イランには、アメリカ合衆国よりも古い、いまだに人の住んでいる家がある。

星条旗は出て行かない、と彼らは言う。そんなことはない。ベトナムから、レバノンから出ていき、そしてやがてアフガニスタンから出ていこう。ご清聴感謝いたします。ついでに、出ていかれるとき、私の話を聞いてくれそうな次の人を、教えていただけませんか？ また電話します。